



VR妊娠★お試し版

意馬心猿

主人公あなた

一人称は私

お相手1：イチチー♂

淡い栗毛色頭、黒目、爽やかな笑みが基本な長男。
俯せの指圧マツサージが得意。

お相手2：次郎♂

短い刈上げ黒髪、黒目、強面の筋肉質な体系、硬派な次男。
色々な中で頭皮マツサージが一番得意。聞き上手。

お相手3：サンサン♂（三吉）

オレンジ頭の耳にピアス付きチャラそうな垂れ目。三男。

ストレッチなマッサージが得意。

お相手4：よっちい♂（喜雄）

ふわふわな薄桃色頭の真ん丸お目々で可愛い美少女な美少年。四男。

美容系を駆使したマッサージが得意。日々、研究中で、お尻に点滴してきたりする。

お相手5：サクマ♂

VRの機械を操作したり見守ったり色々する青年。

今回は挑戦で夢系な書き方を目指してみました。

こちらは試し読みになっています。

よろしく願います。

0話【認知する】

仮想空間内妊娠に関しての推奨は数十年前からあったが大々的に推奨されだしたのは、ここ数年の話だ。国が緩やかに続いていた人口減少化に本腰を入れたのだ。人口減少が始まっていた百年以上前は自然分娩の出産もあつたが出産時の妊婦や胎児の死亡率が問題視され人工妊娠が推奨された。

最初の頃こそ少ない人工妊娠の申込みであつたがリスクへの懸念が少ない事から徐々に支流化され、その結果、今では99%が人工妊娠となっている。それでも年間、数十件は自然分娩をする者も存在するが命の危険性から、あまり好ましいものとはされていない。

培養液内で安全に成長していく胎児よりも人の身で産んでこそ愛があるので

はという一部の団体が、その危険性の主流化を求めているという背景もあるからだろう。

そんな彼らの意見は大多数から煙たがれる情勢であったが数年前、世界的有名な女優が自然分娩の愛情論と培養液内での安全を考慮した一つの作で子供を出産する過程を発表した。

彼女は愛情が現在、育ちにくい傾向にあるのは確かであり、しかし自然分娩の危険性も簡単に挑める事柄ではない事から仮想空間内で妊娠し愛情をもって日々、暮らし胎児の成長と共に、その重み痛みを感じ出産する。その過程全てが流され人々の関心を生んだ。

そして仮想空間内妊娠への認知度が高まったのである。

1話【初恋マッサージュ♡】

淡々とこなす労働の日々の中、広告につられ気まぐれに買えば良い金額の宝くじが当たった。趣味というものが全く無く何もせずにいると虚しさが増すので仕事は特に辞めるつもりはないが疲れを取るぐらい良いかもしれない。

「マツサージかあ……」

マンションのポストに入っていたチラシを眺めて新店舗、初回無料と会員登録したら使える二回目からの割引券を机の上に置く。ネットで一度検索すると場所と店舗名、電話番号が出てきたが口コミは特に無い。開店したばかりの、お店だからだろう。

「行ってみようかな」

予約を取る為に電話をかけると爽やかな声色の男性が応答してくれた。

「はい……では明日、はい……よろしく願います」

声を聴くかぎり愛想の良い店員の彼が言うに家族経営らしい。元々、両親が

やっていた一度閉店した店を改装して今年から新たに頑張るそうだ。

「……ムダ毛の処理しとこ」

意識していると言われればそうだが恥ずかしい気持ちにはなりたくないと思っ
た。

次の日、朝十時十五分頃、開店から少し過ぎた時間に店に入った。白と黄緑色の新装といった外見の三階建てで、ドキドキしながら店員の青年と対面した。胸元には『イッチー☆』と手描きで描いてある。

「此処の従業員、全員苗字が一緒なので僕の事は気軽にイッチーって呼んでくださいね」

「い、イッチーさん」

「あはは。さあ、ちよつとカウンセリングしましょうか」

一人かけのソファアールに座るよう促されて小さな丸机を間にして身体の状況を訊かれた。

「では今日は無料チケットの初回限定6分お任せコースとなります。お手すきは僕含めて他、三名ですが誰を選ばれますか」

高級料理のメニュー表みたいなのを渡されて中を見ると短い刈り上げ強面で黒髪、筋肉質な『次郎』オレンジ頭の耳にピアス付きチャラそうな垂れ目な『サンサン☆』ふわふわな薄桃色頭の真ん丸お目々で可愛い美少女『よつちい♡』が紹介されていた。どうやら、ご両親は復帰してないらしい。

——……女の子の、よつちいさんに……でも、折角面談してくれたし……うーん……

目の前の淡い栗毛色頭で爽やかな笑みを浮かべる、イツチーを見る。

「僕にされますか？」

「あ、は、はいっ」

聞かれて思わず頷けば彼はソファーから立ち上がり手を差し出してきた。

「ふふ。良かった。さあ、ご案内しますね」

「は、はい」

手を引かれ立たされる。

「よっちい受付頼むね」

「はあい」

「ひやつ」

何時の間に後ろにいたのか、よっちいが私の後ろで可愛らしく返事をした。

「うふふ♡ 次はボクを頼んでね、おねーさん♡」

「は、はい」

僕つ子らしい美少女に頷いて軽く手を振られながら進む。

「お、ありがとう」

奥へ進むと扉から出て来た次郎と視線があつた。ガタイ良く筋肉質で背が高い彼を嘩然と見上げる海外のハリウッド俳優みたいな筋肉だ。

「それでは、この部屋でしますので、こちらの個室にて、この紙下着に着替えてください」

「わ、はい……」

イツチーが次郎から受け取っていたのは紙下着だったようだ。次郎は一言も喋らず会釈だけして去って行った。

ガサ、ゴソ……

服を脱ぎ、ちよつと心許ない茶色い紙下着を付けて部屋に戻る。着替え室はシャワーも備え付けられていたので終わったら軽く浴びれるのかもしれない。「横になって頂けますか」

「はい……」

簡易寝台上に俯せで寝そべる。

「それじゃあタイマー入れますね」

ピピピツとセツトする音が聞こえて物がコトリと置かれ背後で清潔感ある作業着を着たイッチーが近づく。その音、一つが何だか緊張して深く呼吸した。「では凝っている部分を解していきましようか」

ぎしりっ。

「ん……っ」

簡易寝台の上に乗った彼は私の腰上に跨がりデスクワークで凝っている肩を触った。

「あー固いですね」

「うああ……そこ気持ちい……っ」

「ふふ。どうです痛みの方は感じますか」

「痛み持ちいです……んんっ」

「腕を回しますよー」

「っあ……っっ」

腕を持たれ脇下のツボを押しながら空中に回されて関節がパキパキと音を鳴らした。痛いけれど気持ちが良い。片方も脇下のツボを押しながら回されて戻される。

「はーい。次は頭部から首にかけて刺激しますね」

「あつ、あつ♡ あたまっ気持ち……っ♡」

頭部のツボを押され、ぐぐつと滑りながら耳裏のツボから首筋へと下がり頭部裏下を押され再度、首筋を押される。

「ひっ♡ は…………♡」

「デスクワークの凝りは偏頭痛も起こしやすいですからね。休憩の合間などに自分でも揉んでみると少し違ってくるかと思います」

「はひ♡♡」

「それに貴女は胸部の重さもあるから余計に凝りが…………あ、偏頭痛は眼精疲労からもくるので目の周りを手の平で温めたり軽く揉むと気持ち良いですよ」

「あい…………♡ します…………♡んあ♡」

「…………声、可愛いですね」

「へ？ んんっ♡」

「電話で、お話しした時から思っていたんです。言われたりしません？」

「ん…………♡ た、たまに…………♡」

「ですよね……」

「ひあ♡」

背中の中の筋肉を体重をかけて押さながら押し流されて気持ちが良い。

「ここ、僧帽筋辺りはご自分でも揉んだりすると思うのですが実際に、ここら辺の重さを取ろうと思うと別の部位から解さないと治らないものなんです」

「はへ〜♡」

肩を触った手の平が私の脇下、背中横の辺りに向かい手の平全体で押される。気持ち良い。

「肩の筋肉が同じ体制のまま長時間俯く事によって絞まって固まっているので……
こう開いて……」

「あっ♡ あっ♡」

脇下から両腕を持たれ、グイッと仰け反らされてパキパキと音が鳴りイッチー
が言う開くを感じた。

「んああ♡ すごい♡」

「……貴女の場合、その胸部がより重さをもたらししているので……こうして……」

「んふふ♡ それ、くすぐった……♡ ん♡ でも気持ち……♡」

脇下の背中横を脇腹横の位置、下から上へと押し上げられて、くすぐりたいが解れる感がある。イッチーは私の尻上に跨がる腰を移動させ少し座った状態で繰り返し解した。

「んっ♡ ふうふう……♡」

「……」

腰から背中にかけて体重を落としながら押し揉まれるのは気持ち良い。温かな手の平が癖になりそうだし涎が出そう。

「んん……♡ あ……♡ ふう……♡」

解れていく身体に瞼が重くなっていく。

「……」

すー……すー……

「……寝られましたか」

光が暗転していく中で彼の問いかけが聞こえた気がしたが私は気持ちの良い眠気に勝つことが出来なかった。

凄かった。マッサージ店は実の所、人生初だったけれど、こんなにも気持ち
が良く身体が楽になるモノだと知らなかった。合法麻薬みたいな魅力がある。
『また、お会い出来たら光栄です』コメント付きで渡された名刺を握りしめて

浮かれてベットの足を転がった。

「……会員登録したし来週も行くぞう」

そう思っていたのに緊急の仕事が入り行けなくなってしまった。最近は半分のリモートワークで本来の休日の今日もリモートワークだ。この案件が終わったら振替休日が入るので、その日にでも行けたら良いな。

「イツチーさんは埋まっちゃってるのか……」

仕事が終わりに速効住処を飛び出し歩きながら店に電話をかけたならチャライ感じの雰囲気の人が出てイツチーは今日は埋まっていると教えてくれた。ちなみに予想通り受付してくれた彼はサンサンのような。写真の通り橙色の髪に染めてピアスも付けている。

「ちなみにーオレは今、空いてるよん☆」

「サンサンさんが受付出来ないと困りませんか」

「あはっサンサンで良いよーさん付けたらカケさんだよねーちなみにね、満席の札扉と受付に置いて電話は留守電に切り替えて対応でーす」

「あ、そうなんです。じゃあ……サンサンにお願いしようかな……」

「あはっよろぴこー♡」

「よ、よろぴこです」

「ええー？ 君、可愛いね♡」

背中を抱かれながら室内へと入っていく。チャライ。ホストと一緒に居る気分だ。ホストと会った事はないけれどイメージ的に、そんな気がした。

イツチーも爽やかなコミ力を見せてくれたが、サンサンは、もっと入り込んでくるコミュニケーションを見せてきた。

「え〜？ こんなに可愛くて、おっぱいデカいのに彼氏一度もないとかガチ？」
「おっぱい……えっと……はい。私、暗いですし趣味とか特に無くてつままない

人間なんです」

「趣味？ 趣味なかったら、つまんないがイコールじゃないしくつーか一緒に楽しめば良くね？ ダメ？」

「え、えつと……そ、そうですね……」

サンサンの陽の気を当てられると心が挫けそうだ。

「んんじやあさ、試しにオレとカレカノになってイチャイチャ楽しもうよ、どう？」

「は……？ い、いえ……大丈夫です」

「それってOKの大丈夫？」

「OKじゃない大丈夫ですね……」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

「ふはっ！ 残念だなあ。奇跡を、もぐりんこしたかったわー」

「もぐ……?」

「オレって一途なタイプなんだけど……よし、準備ばたんく始めるよん☆」

「あ、よろしく、お願いします」

「んっ!」

にっと微笑んで頭を撫でられた。マツサージ以外での驚きの距離感だ。

「ふあ……♡ あ、あ……♡」

予想外なのがマツサージを始めると集中しているのか先程の、マシンガントクが落ち着いた事だった。イツチーも気持ち良かったけれど、サンサンも流石、とても気持ちが良い。

「伸ばすね〜」

「ふああっ♡」

「……」

イツチーは簡易寝台の上でだったが、サンサンの部屋はマットの床に寝そべ

りヨガのような状態でのマツサージだった。兄弟皆、同じではないらしい。

パキパキ。

マットの上にある固めの細長い枕に背中を預け仰向けで、サンサンの補助の元、身が伸ばされる。連続の修羅場ワークの後なので染み渡る気持ち良さだ。涎が出そう。

「はあ……むしやぶりてえ……」

枕上に寝かしている私を緩く開いた脚の間に入れた状態で見下げて真面目そうな顔で、そうサンサンは呟いた。

「……？」

どういう意味だろうか。

「ねえ……マジでオレを並びにしない？」

「へっ？ んっ♡ やあ……♡」

「ん〜じゃあさ彼ぴは一旦、置いといてハグしよ♡」

「ハグ……？」

何故、抱きしめ合うの。

「今後、付き合う前の予行練習だっと思ってさ」

「練習……？」

「あと、ぎゅーつてするとストレス発散になるじゃんね。しよ♡」

背中から支えられマットに座らされて後ろから徐に抱きしめられて身が朱く染まった。

「はあ……♡ 癒されるー♡」

「あ、あ、あの……」

「ん〜？ あ、前からハグしよっか」

「え、わわ」

私の前側にサツと身を移動したかと思うと前側から腕の中に抱き締められて身が固まる。

「んゝ緊張してんね……よしよし」

頭を撫でられて彼の胸元に自分の頬が当たり耳を大きな手で軽く塞がれて温かさを感じた。鼓動を聞くと何だか眠くなってくる。幼い子供にでもなったような気分だ。

——……確かに癒されるかも……

こういった斬新な解しもあるんだなつと、そつとサンサンの背中に手を当てて軽く抱き締め返してみたのだった。

押しに負けて交換した通信アプリで連絡が来る。彼の仕事の日程日を見せられ休日に出たいなくなったら何時でも教えてとの言葉と共に可愛らしいスタンプが現れ。私は適当なフカヒレを怖がるサメのスタンプを押しして来週は、どうするべきか悩む。

「……サンサンの休みの日に行こうかな」

斬新な心解しは恋心に変化してしまいそうな怖さがあるので癒されるが若干避けたくも思う。流石、推定ホストの称号を持つだけある。上手い。きつと同伴をしたら心は一発アウトだろう。

「落ち着こう私……」

返ってきた面白スタンプに、ご当地ゆるキャラおやすみスタンプを押しして布団に潜る。来週は、イッチーかよっちいに揉んで貰えると良いなと思いながら

眠りについたのであった。

今日は会社への出勤日だった。信じられないクレーマーから電話がかかってきて向こうは何を気に入つたのか一時間に一回の割合でかけてきた。名前を覚えてたらしく名指しで悪夢だ。業務に損傷をきたすので着信拒否にしてほしい。ブラックリストにならないか上司に話してみたが可哀想な人なんだよで終わってしまった。可哀想を免罪符に暴言を尋常じゃなく吐くクレーマーに相對するべきなのだろうか。違うのではないだろうか。

「いらっしやい」

「あ、こ、今晚は……えっと予約してないんですけど今つて出来ますか？」
会社帰り辛すぎてやって来た、お気に入りのマッサージ店。今日の受付は強面の次郎だ。相も変わらずハリウッド俳優みたいな素晴らしい太い筋肉をしている。

「俺以外は接客中になります。俺で良ければ……」

「ぜひとも、お願いします！」

食い気味で言えば彼の眉が上がり不思議そうに見られた。

「……つ、今日、ちよつとクレーマーとバトルしまして……まあ一方的に罵られただけで負け戦なんですけど癒しがほしくて……」

「ああ……」

次郎は深刻そうな顔をして頷き立ち上がり受付に満席の札を立てる。

「外にも出してくる」

去り際に肩を、ぽんぽんとされて何だか瞳から涙が零れた。今日は情緒不安定だ。

「それは理不尽だな……キツかっただろう」

歯医者の子椅子みたいなのに座らされて足湯と頭皮マッサージされながら愚痴

を涙ながらに漏らした。

「クレーム自体は良いんです……でも、もっ♡ もうつ業務以上の暴言は頭来ちやって……♡」

「確かにな度が過ぎる」

目元には柔らかい甘い香りのするタオルをかけられて、ぐしやぐしやの顔を見ないようにながら、とても話を聞いてくれる次郎。とてつもなく良い人だ。それにしても頭皮マッサージ気持ち良すぎる。

「んう……♡ 話したら落ち着いてきました……ふう……♡ ありがとうございます
います次郎さん……♡」

「代わりに俺が出れたら良いんだけどな……」

渡されたティッシュで鼻チンしていれば頭を優しく撫でられて、そう言ってくれた。実際は無理でも何だか救われた。

「え……っ」

解しが終わりスッキリした状態で財布を出そうとしマナーモードのバイブだけになっていいるスマホが振動しているので軽く見たら以上な着信件数が通知された。

「なにこれ……」

「ん」

私を覗き込み眉を寄せる次郎。通知アプリに上司からのコメントも一つ。

「……あんまりにも煩いから在宅で受け付けれるように電話番号を教えた？
は？」

上司は家に帰るのを避けているらしく残業を自主的にしていたので私が終わった後もクレーム電話が来たという事だろう。

「……これは明らかに業務では無いな」

次郎が低く呟く。私は啞然と再度、振動するスマホを叩き割るか、どうす

るか考えていれば彼はスマホを掴んで言う。

「かして」

「え……」

特にパスワードロックされていないスマホの電話応答のボタンに触れ出だしから叫ぶ男のしゃがれた声が響く。どれだけ待たせる気だとかクソ女だとかクビだとかヤバイ怒声に私は震えた。

「おい」

次郎が低く呟くと騒音が、ピタリと止まり彼は一言、一言はつきりと言葉を続ける。

「俺の女に何言ってるんだ、お前。会社も、どうかしてるが警察に連絡させてもらおう。覚悟しとけ」

お客様に最低だ頭がおかしいなど声が聞こえ私は成り行きを見つめる。

「違うな。お前は犯罪者だよ」

音が途切れ向こうから通話を切ったらしい。

「着信拒否するな」

「は、はい……」

手慣れた様子で着信拒否され通信アプリの上司側の画面も出すと彼は通話ボタンを触った。数コールで上司が出る。

「こちら○○さんの、お電話をお借りしました○○署の佐久間と言います。ええ。被害者であられます○○さんの事でお話が……」

通話が終わりスマホを返された。

「通話代がかかったな。悪い何か奢る」

「え!? いえ! 大丈夫です! どうか私が奢るべきです! えつと警察つえつと……」

「元々、警察関係だったんだ俺、兄貴に誘われて今はマッサージ師だけど」
「へあ!?!」

「とは言え前の杵柄、勝手に使っちゃった」

次郎がニツと笑い私の身は朱く染まる。

「これでも何かあるなら言ってくれ俺の番号登録しとく」

スマートに電話番号が登録された。私はコクコクと頷いて次郎を見上げる。

「通話録音アプリも入れておいたパスワードは0203」

「0203?」

「俺の誕生日」

「そ、そうなんですな!」

「厄除けが得意なんだ」

「あ、豆まき? 恵方巻!」

「あははっ! 反応、良くて可愛いな」

「かわ、あ、ありがとうございます。あのクレーマーに上司と……」

「これで改善されなきや、そうだな、そこ辞めて此処の看板受付にでもなつて

くれ即採用だから」

「……良いかも」

ゴクリと喉が鳴った。

「マツサージも社員特典でするぞ」

「最高ですね」

その日は心もスツキリして帰宅し彼の電話番号で自分の番号のショートメールをドキドキしながら送る。直ぐに登録完了、ゆっくり休めと返答が返ってきて、おやすみなさいと返しておいた。

誕生日は過ぎていたけれど今日はバレンタインデー。チョコレートの祭典に

行つて従業員全員分の大箱の義理チョコと個別に、お礼&誕生日チョコを次郎に用意した。今日は埋まっているらしくチョコを受付で渡して帰るだけになるが寧ろ、それで良い。恥ずかしくて死んでしまうかもしれないから。

「あれ、おねーさん！ こんにちは〜」

「あ、よつちいさん。お世話になつております」

「うふふ♡ ボクらもボクらも♡」

深々と頭を下げた後、チョコの箱を差し出す。

「こ、これ日頃のお礼で……皆さんで食べて頂けたらと……」

「えー！ やつたー！ 凄い嬉しい♡ あー！ これワイン漬けの果物チョコでコーティングしたやつじゃん♡ 好き好き♡」

前に自分用で買って食べた時に、とても美味しかったものの一番大きなセツトを買った。

「サンちゃんがチョコ貰えるかもつて浮かれてたけど、ははーん？ おねーさ

んでだなあ？」

「あ、サンサンに皆さんが食べられるのを聞いたから……」

「ちなみに、それはサンサンに？」

「こ、これは次郎さんに……」

手に持っていた紙袋を指摘され顔が熱くなりながら言う。

「まさかの次郎兄!? え、ダークホースじゃん♡ 面白すぎる……っ」

よつちいが慌てた様子で、それぞれの時間表を見て言う。

「あと三十分待つて、そしたら次郎兄終わるからボクが残りの受付交代してくる！」

「へー！ い、いえ、これ預かってもらえれば充分なので……」

「えー！ 次郎兄良い身体してるけど男にしかモテてないから手渡し、めっちゃくちゃ喜ぶよ絶対、次郎兄の浮かれみたいー！」

「で、でも……は、恥ずかしくて……」

「……っ！ 胸きゆんの香りがするー♡ ええ♡ ちよー良い♡ ね、ね、ほら、こつち入って座って」

「え、わ」

腰を支えられ受付内の椅子に座らされる。

「満席にしちやお♡」

直ぐさま受付と扉の方に満席の札を付け自由に飲めるウォーターサーバーからお湯を出しお茶パックで焙じ茶を出された。

「お手々モミモミしながら話そ♡」

「ん……っ♡」

「ここ押すと眼精疲労に効くんだよー」

「気持ちいです……♡」

「うふふ♡ ねえねえ何で次郎兄なの？ 顔の良さで言ったらボクが一番だけど、いつちゃんサンちゃんってイケメンじゃん？ あの強面あり？」

「ふあ……♡ その……♡ 次郎さんも格好良いと思います……んっ♡」

「は〜♡ 次郎兄の春〜♡」

手揉みされながら助けてもらった事を話し告白では無いが感謝の思いはある事を言ってしまう。

「なるほどね〜♡ じゃあサンちゃん含めて三角関係って事か〜ふ〜！」

「三角関係？」

お客さんと一緒に歩いてきたイツチーが不思議そうに受付内の私達を見て呟く。私はハツとして受付から出ようとしたが椅子をクルリと回されて後ろから、よつちいにホールドされて逃げれなくなった。

「では、お帰りお気をつけて」

老紳士が帰って行く。カランコロンと扉が閉まり札を下げると思いきや、そのまま、イツチーは受付に戻ってきた。

「お久しぶりです」

「お、お久しぶりです……」

「イツちゃん休憩入るよね。おねーさんが持ってきてくれた高級チョコ控え室持って行って、あ、ボク中の白いの狙いだから、よろしく♡」

「っ……チョコ……バレンタインデー……そうか、バレンタインデーか……」
箱を受け取り、ボソボソと呟いてイチーは爽やかな笑みを向けた。

「嬉しいです。そうだ、何だったら此処じゃなんですし一緒に控え室へ行きませんか」

「んっ！ イツちゃん？ まさか……」

「よっちい抱き付き過ぎだぞ」

「ははーん♡ でもなあ、これから、おねーさんは用事があるもんねー♡」

よっちいが私の肩に顎を置き頬で頬をスリスリしてくる。もちもち感が気持ちいい。

「用事が……もしマッサージなら僕が」

「んふふ♡ もつと甘いチョコみたいに甘い用事だよー♡」

「え……」

イツチーの視線が彷徨い、もう一つのチョコの紙袋に視線が止まる。

「……そちらの幸運は……僕では無いんですよね？」

「だね♡」

よつちいが笑って答える。イツチーが目を細くして呟く。

「三吉か……」

「こわっ♡」

イツチーが笑顔だけれど何か威圧感を発しながら言う。

「……土下座する勢いで頼まりましたか」

「あ、あの、サンサンではなくて……」

「え……？」

そう呟いた時、奥から次郎が客と共に現れて不思議そうに私達を眺めた後、

アメフト選手みたいな人を見送り札を下げて戻ってきた。

「どうした皆して……後、喜雄、抱き付き過ぎだ」

「よしお……?」

「もく！ 次郎兄その名前雄々しいから呼ばないでって言ってるじゃん！」
頬を膨らませ怒る、よつちい。

「こ、こんなに美少女なのに男の子……!?!」

衝撃で一瞬、色々な事を忘れた。

「んふふ♡ 美少女でも良いけど美少年って呼んでくれたら、もっと嬉しいかなあ♡」

「ははは、確かに、よつちいは女の子に間違われやすいですね。さ、離れるんだ」

「んふふ♡ 仕方ないなあ♡」

よつちいからホールドを解放されて一応、紙袋を持ち、チラリと次郎を見上

げる。彼の眉が上がった。

「次郎兄、ほら、ここ座って♡ ボクはいつちゃんと貰ったチョコ食べてるからさー♡」

「イチーを無理やり引きずり引つ張つて少し離れたソファーに向かう、よっ
ちい。」

「あ、あの……椅子お借りしました……」

立ち上がろうとして手を軽く取られ止められる。

「ん、喜雄がだろ？ 気にしないでくれ。あのチョコは君が？」

「は、はい日頃のお礼で皆さんに……」

「そうか三吉も欲しがっていたし喜ぶ。ありがとう」

「そ、それで、こ、これは……次郎さんに……」

「俺？」

「こ、この前のお礼です……」

「あー……そうか……」

頷いて次郎は紙袋を受け取ると中のチョコの箱を取り出す。

「……」

「……」

無言だ。無言で包み紙を取り開けられていく。恥ずかしさで俯いていた顔をあげチラリと見れば、ちよつと果物の甘いジュレが入った生チョコを手でつまんで食べている所だった。

「うまつ」

「……」

「ん、もしかして全部味が違うのかチョコって、チョコ以外もあるんだな……
凄いな……」

「ふふ……」

チョコだけど、チョコ以外と言って食べていく次郎を見て嬉しくなって笑っ

てしまう。笑えば次郎は私を見て少し恥ずかしそうに微笑むと、もう一つチョコを摘まんだ。

「凄く美味しいよ。ありがとう」

帰宅して恥ずかしさや嬉しさでカーペット上に転がり、むやみやたらとコロコロで掃除した。深呼吸して今日の、お礼のショートメールを送ろうとスマホを手にする。すると、アプリ通知が幾つか来ている事に気が付く。開くと、サンサンと今日、交換したよっちいとイッチーからも来ていた。

こんな風に変換しても良い物なのか少し気になる所だが次郎と交換したかったのにアプリを入れていなくて終わり残念だった。いつそのこと本当に受付に

なってしまうのも良いかもしれない。三月には年に一度の続けるかの意思確認があるわけだし真剣に考えてみようか。そんな浮かれ気分、サンサンの通知を読む。

チョコレート嬉しいの言葉と涙を流す猫スタンプ。グッチョブ犬のスタンプを押して、よっちいを開く。チョコレートの写メや彼らが食べている所の写メ、味の感想が細かく可愛らしく書かれていて嬉しい。次郎の映っている写メは直ぐに保存した。

「ふふ……こちらこそ、ありがとうございますっつと……」

未だに美少女としか思えないが確かにホールドされた時は、ビクともしない感があつて力の差を感じた。

「イツチーさんは……あれ？」

何か送った後の削除の後に今日のチョコレートへの感想が書いてあった。後、次郎から聞いたのか受付の仕事をしたくなったら何時でも声をかけてと書いて

ある。

「そうだなあ……リモートも良いけれど受付だって悪くないよね……皆さん休憩時間も取りにくいだろうし……」

一日、真剣に考えてみよう。

「あ、電話……」

通信アプリでイッチーから電話がかかってきたので出る。爽やかな声色が聞こえた。

『こんばんは』

「はい。こんばんは」

『今って話してても大丈夫？』

「はい。大丈夫です」

『よかった。チョコ美味しかったよ、あんな美味いのあるんだね』

「ふふ。美味しいですよ。初めて食べた時、衝撃的で今回は、アレルギーと

か苦手とか無さそうな事をサンサンから聞いて選んでみました」

『ありがとう嬉しいよ』

「ふふ。お世話になってますから」

『あはは、それを言うと僕らもだけどね。常連になってくれて助かってるよ』

カラン、コロロン。

——…：…？

何か今、音が聞こえたような気がする。何か知っているような。

『そうか、そろそろだったね』

「え？」

『また会おう』

「イツチーさん……？」

何だろうか。景色が、ぼんやりとしていく。何か忘れているような。

カラン……コロロン……

世界の色が白くなり私は瞼を強く瞑ったのだった。

☆☆☆間

「サンちゃんは、おっぱい吸いたい？ クンニしたい？」

「へ……お、おっぱい？ クンニ……？ な、なに言ってる……」

私の腹を背後から腕を回して持ち上げると、よっちは私を自身の膝の間に

座らせた。そして戸惑いを浮かべるサンサンに言う。

「どうもボクらの、おねーさんはオナニーもした事ないみたいでさ、ほら見て」
「わ…………お…………」

サンサンがフラフラとベットに近付き花は隅っこに置かれ彼は膝を乗せて私
の、よっちいで開かれた割れ目を見つめる。

「キレイ…………」

「サンちゃんの舌で、うぶ皮むいてあげてよ♡」

「う、うん…………」

サンサンはゴクリと喉を鳴らしベットに伸びる猫のようになると私の濡れて
いるソコへ舌を伸ばした。

「ひんっ♡」

「…………あ、ごめ」

「気持ち良いってさ♡ サンちゃん、もーつと気持ち良くしてあげなきや…………」

「あ、うん……ふう、ふう……」

サンサンの荒い鼻息が触れ舌が割れ目の肉をなぞる。そして膨らむ陰核に触れると舌を、ゆっくりと押し当てた。

「あううっ♡」

今まで何かの拍子で乳房の先っぽが軽く擦れて感じていた気持ち良さとは違う衝撃的な感覚が湧き上がり腰がガクガクと震えた。

「わ……い、今のって……」

「エクスタシー感じちゃったんだね♡ うふふ♡ サンちゃんの舌が気持ち良いってさ♡」

「え、マジで？ お、オレの……」

サンサンは私の陰核を再度舌で触れて優しく舐る。その丁寧な動きが気持ち良くて私の腰は浮かび押し付けてしまう。そうなるとサンサンは両手で私の太股を掴んで顔をより押し付けて、その大事な部分を舐め回した。

「あ♡ あう♡」

私は混乱している。先程まで恐怖と戦っていた筈なのに今では気持ち良さに心が傾いていた。サンサンの丁寧な舌使いが、あまりに気持ち良くて頭の中身が溶けそうだ。

「おねーさん♡ おまんこマッサージ気持ち良いの？」

私の耳元で、よつちいは囁き後ろから乳房を揉み乳首をコシコシと擦る。

「う、うう♡ んあ……♡ ああっ♡」

また腰がガクガクと震えた。どうなっているのか。たまらない感情が自ら、サンサンの頭に触れて髪に指を通してしまう。

「はあ♡ おねーさん♡ 積極的になつてきたあ……キスしよー♡」

「んう♡ んっ♡」

よつちいに顔を傾けられて舌が入り込み先程、覚えた動きを真似して私も舌を合わせて動かす。絡み合う舌が気持ち良い。

「はー……♡ オレ振られ気味だし君のマンコ舐めれるなんて思ってたから嬉しいー……」

ちゆう、ちゆうつと陰核を優しく吸うサンサン。

「……ん、ほら、おねーさんサンちゃんに、おまんこマツサージありがとーつて言わなきゃ……♡」

舌を抜き、よつちいが頬を私の頬に擦り付けて促す。

「あ……♡ あいが、とお……♡」

☆☆☆続きは本編で！ ☆☆☆

よろしくお願いいたします。 拝

VR妊娠★お試し版

発行日 2022年3月1日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
